

「光・陰影・形 — 混沌と輻輳の可能性」

Light, Shade and Form —The Possibility of Chaos and Congestion

神 田 每 実

KANDA Tsunemi

I think that it has had influence with a climate important for various styles which culture and civilization show. And I think that it will be approached from analysis of a style of art, technique, etc.

As the beginning, the report which made the keywords a “climate”, a “light”, a “style”, “human being”, etc. was performed, and there described relation of a “light”, a “form”, and a “style” last year.

Before going into concrete particulars -- the “light” as a “climate” and an element which constitutes it -- in other words, it is considered that “the environment of light” needs to advance an idea further. In the main subject, the idea about “light” and “the environment of light” are deepened, in addition argument is advanced about a overlap of culture, composite, main’s susceptibility, etc. The keywords of this paper are the “earth”, a “climate”, the “weather”, “light”, the “shade”, “a life of man”, etc.

1.

物体が自らの体内をとおる軸を中心に回転することを“自転”と言ひ、これを英語では“rotation”と言う。この言葉の語源は、回転、交代という意味を持つラテン語“rotatio”で、車輪、円板という意味を持つ“rota”に基づく。“Rotation”はこのほかに、回転、回転角、回旋、回転運動、規則正しい交替、捻転、などの意味を持つ。

自転の中心となる軸“自転軸”を、英語では“rotation axis”と言う。“Axis”とは軸のことで、“中心線”の意味も持つ。“自転”“自転軸”、これらは一般には天体のそれを指して用いられる。

天体が1回転に必要な時間を“自転周期”と言ひ、英語では“rotation period”とあらわされる。

ここでの“period”は“周期”の意味で用いられている。語源は、ひとまわり、巡回、星の軌道などの意味を持つギリシャ語“periodos”、期間、時期の意味を持つ古代フランス語“periode”であるという。

地球の“自転周期”は約24時間であり、これが地球の1日、つまりわれわれ人類の1日である。“Period”には、終わり、終止符、完結文、以上、もうおしまい、期間、年月、時代、時間、一巡りの道、などの意味がある。1日は、われわれ人類の生活のおそらくは一番小さな体感的、実感的な一区切りである。

天体が自身の体内をとる軸を中心として行う回転運動を“自転”と言うのに対して、天体が他の天体の周りを回る運動を“公転”と言い、これを英語では“revolution”と呼ぶ。地球は太陽の周りを公転しており、角度にすれば1日に約0.99度、1月に約29.59度移動し、約365日かけて1周する。これがわれわれの1年であり、1日の次の一区切りである。

回転する、という意味のラテン語“volvere”と、接頭語“re”が結びつくことで、回り戻る、という意味を与えられた“revolvere”の名詞形“revolution”を語源とする“Revolution”は、革命、大改革、循環、回転(数)、旋回、周期などの意味を持つ。

物体が他の物体の周りをまわることを“周回”と言い、その運動を“周回運動”と言う。そして天体が他の天体の周りを周回する、すなわち公転するときの道筋は“公転軌道”と呼ばれ、さらに周回運動を行う天体によって周回される天体との間に描かれる面は、“公転軌道面”と呼ばれる。地球の自転軸は、太陽との“公転軌道面”に垂直ではなく、そこに下ろされる垂線に対して約23.4度の傾きを持つ。

地球上にはまた“回帰線”というものが存在している。英語でこれを“tropic”、ギリシャ語で“tropē”と言う。“Tropic”にはこのほかに、“熱帯地方”“熱帯(熱帯地方)の”という意味がある。語源であるギリシャ語の“tropē”は、“turning”の意味を持つ。地球上の“回帰線”は、太陽が“回帰”する線である。地球の自転軸が約23.4度の傾きを持っているために、(地球から見れば)太陽は赤道の北と南それぞれの23度27分(約23.4度)を通る“緯線”の間を、往復をすることになる。太陽は1年をかけてこの緯線の間を、北→南→北あるいは南→北→南と“回帰”する。太陽が回帰するこの赤道を挟んだ約46.8度(赤道から北回帰線までの角度約23.4度+赤道から南回帰線まで角度約23.4度)の幅の地域は、地球上で最も“日照時間”が長く“太陽高度”が高い。そこが“tropic”つまり“熱帯地方”になる。

太陽の1年をかけた南北回帰線間の往復は、“日照時間”と“太陽高度”の地域差を地球上にもたらし。そして、この“日照時間”と“太陽高度”の地域差を最大の要因として、地球上に“季節”が

もたらされる。地軸の傾きは、地球上に“季節” = “season” を誕生させている。“Season” は、ラテン語の種まき、の意味を持つ“satio”、種まきの時期の意味を持つ古代フランス語“saison”を語源とする。

“季節”とは“天候”の移り変わりによって1年を区分したもので、春、夏、秋、冬や、乾季、雨季などがこれにあたる。“天候”とはいわゆる“天気”のことである。晴天、曇天、雨天や気温、風などの状態のこと、つまり“大気の状態”のことである。天候はその時々“極めて短い時間での大気の状態”をさす言葉である。

“天候”が短い時間での大気の状態を示す言葉であるならば、晴天や曇天、気温、風、湿度や気圧などの大気の状態を、“総合的”に示す言葉が“気象”である。そしてその“気象”の“平均的な状態”、つまり“長期間に渡って定まった状態”のことを“気候”と呼ぶ。

“気候”をあらわす英語“climate”は、ギリシャ語の“klima”に由来する。“Klima”とは、傾斜、太陽の傾き、すなわち太陽高度を意味し、(緯度で見たときの)地域の意味を持っている。太陽高度の低い高緯度地帯は寒く、太陽高度の高い熱帯地方は暑いから、太陽高度と気候とは深い関係にあると考えられる。そもそも気象のエネルギー源は太陽熱の放射である。太陽熱の放射による地表面の加熱により大気が暖められ、そこに発生するエネルギーの不均一さが、結果的に様々な“気候”をつくる。その加熱の仕方や程度は、緯度や季節によって変化するばかりでなく、地表面の状態によっても大きく変化する。“Climate”はこの他に、(ある特定の気候の)土地、地域。(ある地域、時代などの)風潮、思潮、風土、雰囲気、情勢という意味を持っている。

地球の表面は“海”と“陸”にわかれている。ここにあって“状態”という考え方を持ち込めば、“海”と“陸”を“地表の状態”として捉えることが可能になる。そしてこの“海洋”と“大陸”という“地表の状態”は、おそらく気候に影響を与えている。それは、同緯度帯の海上と陸上の、季節ごとの気温変化の様子が異なることから判断できるのである。

気候に影響を与えるもうひとつの大切な要素に、大気の循環がある。大気の循環は、太陽の熱放射による地表の加熱を直接の原因とする上昇気流と地球の自転の影響により発生し、熱や水蒸気をその風によって広い範囲に運ぶ。それは、地球上の気温や降水量の分布に重要な役割をはたしている。

陸の表面は、“山岳”“森林”“草原”“砂漠”“都市”などに分類することができる。そしてそれらの“状態”(ここでは“状態”は、ふたつの意味を持つとする。ひとつは“都市”のような人工物も含めた“地形”であり、今ひとつはその“地形”自体の状態である)は、気温や降水量の地域的な分布と深く関係している。それら地表面の状態は気候に影響を与えるから、気候と地表面はおたがいに

影響を与えあう関係にあると言える。沿岸部、内陸部、あるいは標高といった地理的条件も気候を決定する大切な要素である。

気候はわれわれの生活に様々な影響を与えている。それを示す例は、たやすく挙げることができる。たとえば冬の季節風による降雪。たとえば梅雨の長雨。日本列島を縦断する山地、山脈の存在によって、日本海側と太平洋側では季節ごとの降水量がずいぶんと異なる。風の質などもずいぶんと異なる。それは単なる体感としての差異を超えて、視覚を通してはつきりと確認される差異を創り出す。それはわれわれの生活を取り囲む“自然環境”“風景”＝“風土”の差異である。地域の生活感や地域の文化は、それらを色濃く反映している。そこには、人間の生活を含む新たな“風景”が生み出されている。そのことを否定する者は、おそらくそう多くは存在しまい。

思えば“風景”は、自然界の作用だけで創られるとは限らない。人間の手によって“新しい風景”が創り出されることも考えられる。灌漑や植林により、不毛の砂漠に緑地が生み出され、何十年ぶりかの雨が降った。そこには驚きと共に、新たな感情が芽をふいたはずである。人の生活が自然を映し出すように、自然もまた人間の行為を如実に映し出すようだ。

2.

“銀河系”＝“天の川”全体は、秒速約600kmの速さで獅子座の方向に動いているという。そして地球は、秒速約29.8kmの速さで太陽系全体と共にヘラクレス座の方向に動いており、地球とその衛星である月は、楕円軌道を描きながら太陽の周囲を一緒に周回している。われわれが普段こともなげに暮らしているこの“地球”自体は、いったいどのような動きをしているのであろうか。

太陽を周回する地球の軌道の長さは約9億3890万kmであり、地球は1年をかけてその行程を移動する。それを単純に計算すれば、地球はその軌道にそって時速約10万7200km（秒速約29.7km）で移動していることになる。さらに、地球の自転周期は23時間56分4.1秒であるから、自転の速度は赤道上で時速約1600km（秒速にして約444m）、北緯45度の線上で時速約1073km（秒速約298m）となる。つまり北緯45度線直下のミネアポリス（アメリカ合衆国）や、その緯度に近いボルドー（フランス共和国）、トリノ（イタリア共和国）、ウルムチ（中華人民共和国）などは、時速1073km前後で振り回されていることになる。ちなみに南半球では、南緯45度の緯線が横切る陸地は、オセアニアのニュージーランドと南米のチリ、アルゼンチンだけである。南半球の地形は、海洋が多くを占めている。

われわれ人間の想像力などまったく及ばない、凄まじくダイナミックな地球や宇宙の運動。その中で、われわれはもみくちゃにされながら生きている。

個々の地域には、独自の天候、気象、気候がある。それらは、地球の自転軸に与えられた約23.4度の傾きと、地球の公転によってもたらされる日照差、太陽高度差によって生み出される。日照差と太

陽高度差は、地球上に強い光の地域、弱い光の地域を生む。そして大気の熱量に差を与える。“熱量”＝“エネルギー量”。地域ごとの大気を持つエネルギーに“差”が誕生する。

強い光の地域は明るくて、光の反射量が多くて、暑く、弱い光の地域は暗くて、光の反射量が少なく、寒い。そしてそのふたつの地域の間にはその中間の性格を持つ地域が存在し、その存在によって、それらは切れ目無く繋がっている。しかし、それらの関係は大変複雑である。地球の“状態”がそれには深く関与している。地球の“かたち”と“動き”が深く関与している。

太陽を周回する地球。宇宙空間に照らし出されるその姿は、“光”と“闇”の劇的なコントラストと共に在ることをわれわれは知っている。その地球は約24時間をかけて自ら1回転する。そしてそれによって夜と昼が生まれる。

昼は明るく、夜は暗い。昼の次に夜が、夜の次に昼がめぐり来る。われわれは一般にそう認識している。それは確かに間違いではない。しかし宇宙空間に照らし出される地球の姿は、光と闇の劇的なコントラストと共にある。そこには“夜”と“昼”が“同時”に存在している。“光”と“闇”は同時的、かつ交代し得る“現象”であって、永劫的に固定されるものではないのである。“夜は暗く、昼は明るい”というような紋切り型のイメージは捨てるべきだ。

極地方における白夜や、ビザンティン・タイムにおける1日の概念¹⁾。地球上には、われわれの定型的なイメージを超えて、さまざまな1日があちこちに存在している。

“光”は“昼”を生み、同時に“夜”を生む。“夜”はその懐に“闇”を抱き、“闇”は“光”の到来と共に去る。人間は“光”と“闇”の中で、自らの“生”を営んでいる。

人間は“陽の光”と共に生きている。そして“陽の光”は“闇”と共にある。“闇”と“光”は一体（対）であり、それらはそこに“同時”に存在する。地球の半分を覆う“闇”は“陰”である。そしてそれは“夜”としての“闇”である。“光”は同時に“闇”を創る。すなわち“昼”にも“闇”は産み落とされる。“昼と夜”、“闇と光”。“闇”と共に“影”が産み落とされる。“陰”が“光”によって産み落とされる“闇”ならば、“影”は“光”によって産み落とされる“闇”の“かたち”である。

朝日、朝焼け、白日、夕日、夕焼け。逆光、全光、星影、月影。われわれの日常は様々な光に溢れている。それらは独自の気象条件、独自の地理的条件の下で生まれ、同時にそれを反映した様々な風景を周囲に生み出している。そしてわれわれは、その自らの慣れ親しんだ光の中で、それぞれの生を営んでいる。

人の生活は、“陽の光”と“闇”と共にある。そして様々な濃淡を持つ“陰影”と共にある。個々の独自の生活は、独自の“陰影”を持っているのである。すなわち文化や文明は、個々に独自の“陰影”と“光”、そしてそれらを含む独自の“気候”“風土”と共にあるのである。

地域には地域の光がある。そこには同時に地域の“陰影”が存在する。“光の環境”とは、光と陰影を一体として考えて、初めて見えるものであろう。人はそこで、独自の生活を営んでいる。

独自の“光の環境”は、独自の“リアリティー”を示す。それは他の地域でのリアリティーを基準として生活をしている者にとって、おそらく“驚き”であり、“新たな美”として認識されるものであると考えられる。個々に独自の“光の環境”は、しかしその地に生まれ、生きる人間にとっては日常のものである。驚くに値しない、一般的なものである。それは生活の“前提”として存在する“了解事項”である。その“了解事項”のことをわれわれは“常識”と呼んでいる。文化や文明は人間の生活の集積であり、様式や形式はその“かたち”を示している。それはその担い手たちの生活感、現実感、ものの見方、考え方の“かたち”を示している。

“了解事項” = “常識”のうえに、すなわち既知のものの上に展開する日常生活の中に、われわれが“驚き”や“美”として感ずるものが存在しないわけではない。夕日は常に美しいものであったであろうし（不気味なものであったかも知れぬが）、“隣の家の娘が織る反物は常に町一番の美しさ”との評判で、“引く手あまたの大人気！”ということもあろう。しかし、それらは一定の基準、物差しを前提に語られることがほとんどである。

われわれが個々に特徴的と感ずる文化や文明は、それ自体の担い手にとって、実は特別なものではない。真にそれを特徴的と感じ、“驚き”“新たな美”として認識、発見する者は、その文化や文明から遠く離れた風土の上に、自らの“かたち” = “リアリティー”を置く旅人、異邦人、異文明者、他者であった。

強い光の地域には“強い陰影”が生み出され、弱い光の地域には“弱い陰影”が生み出される。そしてその中間に、いわば“ちょうど良い” = “明から暗までが満遍なく生み出される”地域が、おそらく存在する。光”と“闇”、そこに生まれる“陰”と“影”。それぞれの風土は、そこに暮らす人間の生活と、緩やかに、かつ複雑に結びつき、“かたち”を変えながら結び合い、より広い生活圏、文化圏、文明圏を形成し、最後にすべてを含む“地球” = “マクロの風土”を生み出していく。

漆黒の宇宙空間に青く光りながら浮かぶ水の惑星“地球”は、その“光”と“闇”の美しいコントラストの内側に“人間の風土”を隠している。

3.

北回帰線直下、今はナセル湖の岸に建つアブシンベル神殿²⁾の中枢部は、秋分、春分の日の出どきに、その光が神殿中央の小さな入り口から差込み、神殿奥約55m先の王と、その他3体の神の像を照らし出すように造られていてという。光によるその表現効果は劇的で、おそらくは言葉も失うほどのものであったであろう。アスワン・ハイダムの建設による水位の上昇。水没を逃れるため、ユネスコによって約64m高台に注意深く移築されたアブシンベル神殿。地球のスケールに対して64mとはど

れほどのものであろうか。その巨大な岩石による装置は、今はもうその機能を働かせることはない。

天体や宇宙のダイナミックな運動は、同時に恐るべき厳密さを持っている。古代エジプト人が成したというこの微妙で精緻な計算は、驚くべき量と様々な質のデータを観察において積み上げ、さらにそれを演繹的に運用できるまでに育てなければ不可能である。それは“光”と“闇”に対する、彼らの様々な“意思”や“興味”の存在を、われわれに指し示すひとつの例である。

光と闇に対する人間の興味を示す最も典型的なものは、日時計であろう。メソポタミアかエジプトのどちらかで初めて創り出された、あるいは見いだされたと言われるこの単純な仕掛けは、実は古代からの最も成功した科学機材であった。

それは“時間”を定量化することを可能にした。そして“時間”の流れを“空間”に“視覚化”させた。それは、“見えないもの”＝“不可視なもの”を、人間の手によって目の前に現すものであった。時間はわれわれの身の回りのいたる所に存在し、空間、日常を満たしていた。

もっとも、エジプト人などは、太陽高度や時刻を知るためにというよりは、日の出、日の入りの方位の測定に主眼をおいてそれを使用したという。ナイル川の氾濫の始まりと終わりの時を知ることが、その最も重要な目的であった。今よりもはるかに、自然に身を任せる生活を送っていた時代のことである。有名なナイロメーターも、そのように考えれば水位を目盛りとした日時計として見えてくる。

しかし地球の風土は、宇宙のそれとは比較にならないほど気まぐれである。火山の噴火を原因とした冷夏や天候不順、気流の移動を引き金としてもたらされる気温の上昇。複雑で微妙なバランスの上に成り立つ“地球という風土”は、たびたびそのバランスを崩す。そして崩されたバランスは、そう易々とは取り戻されはしない。ナイル川の水位を目盛りとした日時計も、しばしば人間を裏切ったに違いない。

“気まぐれな地球”＝“不安定な地球という風土”。それとは無関係であるかのような厳密な天体運動と直接結びつく日時計は、それゆえ、近世の精密な機械時計がそれにとって変わるまでの何千年もの間、様々な尺度の中心にあった。

“光”と“闇”が人類の生に極めて切実であった長い時間の中で、様々な興味は様々な体験を生んだ。それは時と共に、地球や宇宙を分析的に観察し思考する態度を、われわれの中に植え付けていった。そしてそれは体験を積み重ねた結果として生み出される“経験”をへて、単なる知識を超えた生活の規準、人類のほとんどを乗せることができる、大きな生活の規準を生み出していった。

“様式”や“形式”は“人間の生活”の上に成り立ち、生活はその地の“光の環境”の中にあり、そして“光”は“風土”の上に在る。ならば、造形物が“光の環境”のもとで創る“明暗”、言い換えれば“光”と“陰影”の“コントラスト”＝“明暗の強度”を手がかりに、“光”が造形様式とその技法に与えた影響を探ることが可能ではないか。

4.

造形美術に代表される視覚芸術において、“光”や“光の効果”は、それ自身が“表現”の対象として、あるいは“表現のための手段”として、立体、平面等の分野を問わず、様々な形で登場している。レンブラントやデューラーの仕事において人物を照らし出す光。バルビゾン派³⁾の画家ミレーやコロアの仕事において積み藁を照らし出す光。ゴシック教会のバラ窓やステンドグラス、それを通して差し込んでくる美しい光。金色に輝く仏像の光背。人間を超えた力、徳を示す記号や道具、またそれらを演出する装置として、あるいは特定の主人公やテーマを示すための手段として、“光”はしばしば恣意的に創り出され、用いられている。時代により、地域により、様々な差異をみせるその表現には、その芸術作品が産み落とされた時代の精神や風土が渾然一体となって示す“リアリティー”=“実存感”が、眩いばかりに輝きながら存在している。

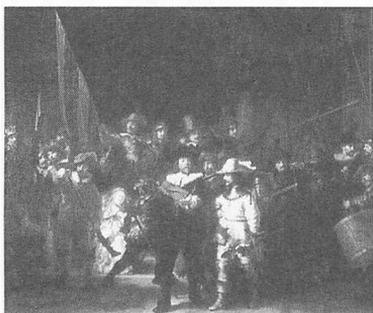


Fig. 1



Fig. 2

それは、われわれが自らの時代の精神や地域の精神的風土、地域の自然の風土

を超えて“光”や“光の効果”に強い力や価値を見出していることを示している。

今“強い光”が存在する。そこには自ずと“光”と“闇”との“激しいコントラスト”が創り出されている。今“淡い光”が存在する。そこには自ずと“穏やかなコントラスト”が創り出されている。

強い光の風景は、激しいコントラストで満たされ、まばゆく輝き、穏やかなコントラストを示す光の環境は、淡く連続する茫洋とした風景をわれわれに見せている。そのコントラストは、その地の、その瞬間のリアリティーを示している。そしてその地のリアリティーとは、そこで生きる人間のリアリティーに他ならない。人はそれを受け入れ、“常識”として“了解”している。

“光”は“闇”と共に存在する。“闇”は“夜”であり、“影”であり、“陰”である。そして“光”は対象を照らし出す。それは“闇”から対象を浮かび上がらせる。われわれ人間は、“光”と光の存在によって顕わにされる“闇”とによって、その地のリアリティー、その瞬間のリアリティーを表現することができる。われわれは自らの手で、リアリティーを再現すること、創り出すことができる。

5.

われわれ人間が存在する以前から“光の環境”は存在した。それは、地球の運行、太陽との関係、それによって発生する気候や気象、風土が一体となって生み出される。そして“光の環境”は、そ

の発生以来、絶えず変化し続けてきた。もっともその変化は、長大な時間の中でゆっくりと進行するものであろうから、われわれ個人が持ち合わせている時間などではとても認識できるものではないと思われる。しかしその雛型であれば、われわれは見、感じることができる。

“Rotation”と“Revolution”。それぞれによってもたらされる短い時間の一区切りにおいて、われわれはその地の“光の環境”を見、感じることができる。

われわれはかつてから在り、変化し続ける“光の環境”に生まれ、進化の道を歩み、新たな風土や地域ごとのリアリティーを築いてきた。見方を変えれば、それは順応の歴史として捉えることができる。

今を生きることが現在よりもはるかに難しかった時代。すなわち“死”が日常であった時代。“死”が“了承事項”＝“常識”であり、永らえることが“非日常”であった時代。そこにおける“風土”や“精神”への“順応”は、おそらく単なる“従属”を超えて、“生”へ向けての能動的な動きを含むものであったと思われる。そこには“死”を前提とした、多くの人間同士の戦いも含まれていた。

日常に溢れている“死”は、しかし“不可視”なものである。“見えないもの”が“見えているもの”を、次々とどこか知らない場所に引きずり込む。“見えないもの”“不可視なもの”が周囲を満たしていく。“光”が“闇”に飲みこまれていく。“死”を“不可視化”の現象として捉えたとき、“生”に対する欲求、あるいは“生”の証明は、“可視”“可視化”への欲求、“可視”“可視化”として考えることが可能になる。ここに“光”は“生命”の記号として、“可視”は“生命”の証明として新たに立ちあらわれてくる。

見えないもの、すなわち不可視であるもの。不可視であって了承できないもの、すなわち自身の存在を脅かすもの。それが観念や空想、想像を超えて具体的な対象、つまり“物”や“人”に置き換ったとき、“自分の生”＝“自分の了承事項”＝“自分の常識”を否定するものへの激しい憎悪と破壊と殺戮が生まれる。

“死”が非日常になった現在、“死”はそれ自体が驚きの対象となった。生きることが容易になったかのように思われるような現在において、もはや他者の“死”を前提とした“風土”や“精神”への順応は存在しない。人類を構成するわれわれ個々の間に横たわるものは、単なる“地域差”、すなわち自らが生まれた地域の自然や風土によって育てられた“現実感”＝“リアリティー”と、それによって醸成された“前提”“了承事項”、その地の生活様式を基盤とした“常識”の“差異”のみであることに行き当たる。

しかしながら、リアリティー＝実存感とは複雑なものである。それはおそらく、縦横無尽に連なり、絡まる、自然の構造の複雑さと極めて似たものであろうと思われる。ただ日常において、われわれはそのことをあまり意識しない。それは、基本的にわれわれが自らの風土の上であり、さらにその地域

固有の生活の中に身を置いているからであり、ほとんど“閉じられた風土”＝“閉じられた生活圏”において、おそらくは“閉じられた精神活動”を行っているからである。

地域固有の生活は、一種の“約束”＝“了解事項”の上に存在している。“約束”＝“了解事項”の上に成り立つ地域の生活は、その地域固有のものとして一見単純で、一まとまりであるかのように見える。しかし地域の生活を構成する個々の生活は、それぞれの経済、すなわち、個々それぞれの物質の連鎖と個々それぞれの精神の連鎖によって成り立っているのであり、当然個別に異なる“色彩”を持っているはずである。つまりわれわれは、それら個々の生活が持つ個々の色彩の輻輳の結果として浮かび上がる、いわばマクロ的な意味での、結果的に混色された“色彩”、あるいは折り重なった“かたち”を“地域の固有性”として捉えているに過ぎない。

個々の地域の生活は、それ自体すでに十分に特徴的であり、十分に複雑である。それはその地域の生活を構成するひとつの単位、すなわち家あるいは家族の内部においてすら同様である。しかし、地域と地域が緩やかにつらなり、その結果、広範囲にわたって生み出される“新しい風土”は、一家族のそれとは比較にならないほど複雑である。

それらを複雑にしているものは、様々な交流の結果としての輻輳である。それは戦争による支配や被支配、貿易や混血といった、それこそ考えられるほとんど全ての物質的、肉体的、精神的“交差”によって発生する。そしてそれは、おそらく“時間”と共に複雑化する。それら

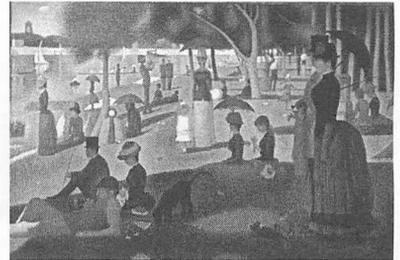


Fig. 3

は“時間”と共に“広域化”し、よりマクロ的な視点から“総体(態)”として認識されるようになって考えられる。

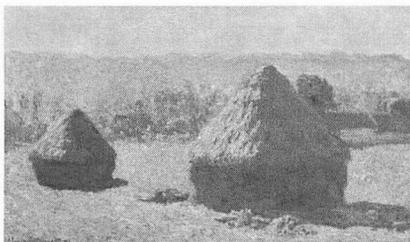


Fig. 4

われわれは常に“新たな精神”を生み出してきた。それは人間によって生み出された“新たな風土”であった。“新たな精神”による“新たな風土”は、後に“時代”として個別の名前を与えられてゆく。

それらは“時間”と共に結び合い、重なり合い、複雑さを増し、そうしながらもそれは、あたかも新印象派⁴⁾の画家スーラの点描技法⁵⁾による作品や、印象派の画家モネによる作品に見るような“新たな色彩”と“かたち”を産み、輝きを放つ。

“新たな色彩”は、混血により生み出される。文化的混血、交配により生み出される。文化的混血、交配は、確実に、より広範囲に及ぶ“人の日常”の“結びつき”を創り出す。そこには“かたち”が存在する。

個別の文化や文明は、確かに個別の“かたち”を持っている。しかし時の経過と共にそれは、“時代”というものの中に混在して内包されるようになる。もはや個別の“かたち”は、時代の一部としての存在となり、輻輳の結果としてそこに生まれる“新たなかたち”が、“新たな時代”を示すようになる。そしてそれは、とてつもなく複雑で、その個別性を解きほぐすことが困難な“新たな風土”を生み出していく。

しかし、緩やかで穏やかなその広範囲にわたる結びつきは、やがて複雑さを基盤としたまま、より均一的で広範囲な結びつきへと質的な変化を見せていく。

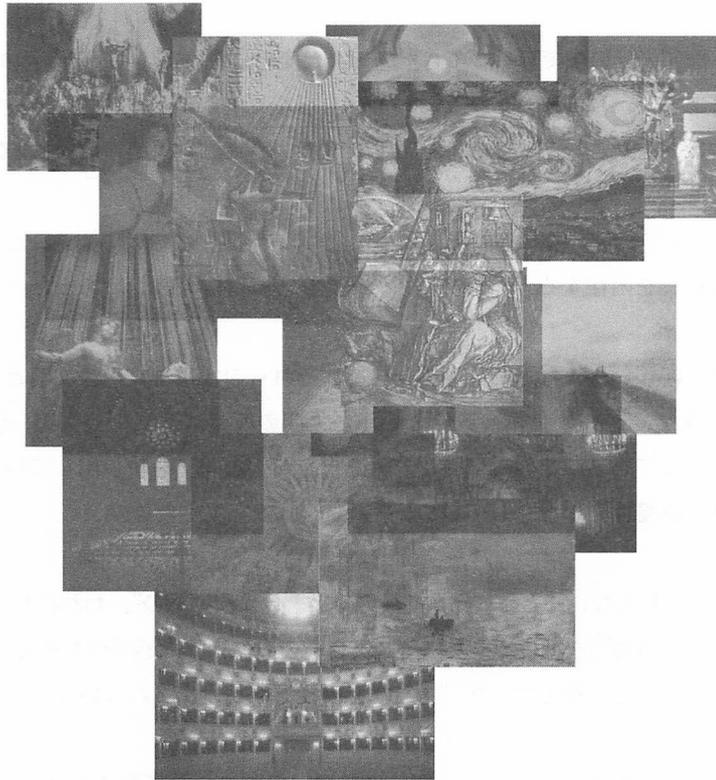


Fig. 5

生活とは物質の連鎖と精神の連鎖による、色彩豊かな一枚の布に例えることができる。

もしこれを解きほぐすことを試みるのであれば、われわれは単純なものが緩やかに結びついていた時代へと、時代を遡るほかはない。勿論、人類は交配を繰り返してきたわけであるから、まったく単純な“精神の風土”というものがあり得るわけではない。しかし同時代でありながら、見かけ上明らか

な異なりを見せる古代文化や文明、あるいはそれらが示す“様式”や“形式”の比較は、その結びつきの緩やかさゆえに、現代のそれと比較するならば、明らかに鮮明な個別性を見せてくれるに違いない。

造形美術は視覚芸術である。それは見えなければ意味を成さない。

“様式”や“形式”は“了承事項”を前提とした生活の上に成り立ち、その生活はその地の“光の環境”の中にあり、そして“光”は“風土”の上にある。ならば、造形物が“光の環境”の下で創る“明暗”、言い換えれば“光”と“闇”“陰影”の“コントラスト”＝“明暗の強度”を手がかりに、“光”が造形様式とその技法に与えた影響を探ることが可能となってくる。

われわれは様々な“光”の中で暮らしてきた。刻々と変化し続けていく“光”の中で暮らしてきた。陽の光の中で、月あかり、星あかりの下で、いや、自らを見失うほどの“闇”の中ですら、われわれは様々な営みを続けてきた。“光”と“闇”の中で、われわれは様々な営みを続けてきた。

“暮らし”“営み”＝“生活”は、その形、大小に関わらず“経済”と見なすことができた。しかしそれは“精神の活動”を内在する“物質の連鎖”“物質の連続体（態）”であった。

われわれは常に、新しい様々なものを生み、育て、それらの集積を文化や文明として開化させている。そして経済、文字、音楽、美術、政治といった人間の所産は、文化や文明、時代の持つ独自の“かたち”を映し出している。それは同時に、人間自身の“志向”を映し出している。そしてその基盤には“風土”と“感受性”が存在している。

“見えること”と“見えないこと”。“見えるもの”と“見えないもの”。われわれは、“光”と“闇”の中で絶えず“精神の活動”を続けて来た。そして自らの内に様々な感受性を育ててきた。そこには、“時代”“風土”“生活”と一体となった“新たな感受性”が生み出されている。

日の出による闇からの解放。日没による闇への帰還。それをつなぐ穏やかな変化。“光”と“闇”の中で繰り返される体験を共通の経験へと昇華し、紡ぎながら、われわれは様々なものを育ててきた。

刻々と変化し続けていく“光”の中でわれわれは暮らしている。そしてわれわれはそれによって様々な“感受性”を自らの内に育てている。

個々の“かたち”は“時代”というものの中に混在して内包されていく。個別の“かたち”は“時代”の一部分としての存在となり、輻輳の結果としてそこに生まれる“新たなかたち”が“新たな時代”を示すようになる。それは穏やかで緩やかな、それゆえにとてつもなく複雑な、いまだ見ぬ広

りをもった“新たな風土”として、われわれの前に姿を現す。

“新たな風土”は“新たな光”を放つ。それは眼前の“未知”であり、“光を放つ闇”であり、おそらくすべての可能性を含んだ“混沌”であり、人間の“精神”の活動を含んだ“かたち”の幅輳であり、人間の生活に含まれるすべての“感情”“知識”“知恵”をはじめとする“情報の集合体（態）”である。それはあまりにも高密度で多重な“結びつき”である。それゆえにそれはしばしば“混沌”として受け取られる。しかしそこには巨大な可能性が含まれている。

“混沌の闇”の中で、“結びつき”＝“情報の集合体（態）”は“新たなかたち”を示し始め、やがて“新たな時代”を表わす“明瞭なかたち”＝“形”＝“様式”として“新たな光”を放ち出す。

“光”“陰影”“形”。われわれは地球を覆い、彩っている“光と闇の可能性”によって、過去を超えてすでに強く結びつけられている。

19世紀の末、ひとりの天才発明家⁶⁾によりもたらされた人工の太陽と星明かりによって、人類は“夜”を開いた。自らの手で“夜の闇”を開いた。はるか高空から、いまや地球外からもはっきりと確認できる、地面に這いつくばるように広がる“光の瞬き”の中で、われわれはおそらく“新たな感受性”を育てている。

(「光と形—古代美術とその技法にみる光の影響とはたらき—(2)」)

註及び参考文献

『Microsoft エンカルタ総合百科辞典2002』『Microsoft エンカルタ総合百科辞典2003』Microsoft. Co,

村上春樹『雨天炎天』東京：新潮社, 1992

『Microsoft Bookshelf version 3.0』Microsoft. Co,

堀井令以知『外来語語源辞典』東京：東京堂出版, 1994.

荒川紘『日時計＝最古の科学装置』東京：海鳴社, 1983.

上原敬二『日時計と日照』東京：加島書店, 1989.

養老孟司『バカの壁』東京：新潮社, 2003.

神吉敬三, 若桑みどり『世界美術大全集 第16巻 バロック』東京：小学館, 1994.

嘉門安雄『西洋美術史要説』東京：吉川弘文館, 1977.

1) 村上春樹『雨天炎天』東京：新潮社, 1992. pp46を引用。

「つまり我々はあなたがたとは違う時間性の中で生活しています。これはずっと昔から続いている時間性で『ビザンティン・タイム』と呼ばれています。この『ビザンティン・タイム』では一日は真夜中の十二時にはなく、日没に始まります。だからあなたがたの真夜中は我々の午前四時になるわけですね」

- 2) 前1250年ごろに、エジプトの王ラムセス2世によってつくられた、古代エジプトの岩窟神殿。
- 3) 嘉門安雄『西洋美術史要説』東京：吉川弘文館，1977，pp393～97 パルピゾン派を参照
パルピゾン派。以上のようなイギリス風景画の作品が大体1820年代の中頃から（中略）17世紀オランダ風景画を改めて見直すようになり（中略）自然そのものの中に没入して、新しい自然主義絵画を興した一群の人々がある。（中略）彼等はバリ郊外のフォンテンブローの森の一端パルピゾンに集まって生活し、制作したので、パルピゾン派の名前で呼ばれている。（以下省略）
- 4) 嘉門安雄『西洋美術史要説』東京：吉川弘文館，1977，pp410～11を参照
新印象派（点描派）。光によって醸し出された色の変化と、一色にみえる中に含まれるさまざまな色の要素の微妙な複合と結合は、要するに色彩の断片を（中略）大体1880年過ぎ頃から、はっきり現れてきたが、その一群の人々を新印象派、あるいは点描派と呼んでいる。
- 5) 点描技法とは、純色の小さな点で画面をぎっしりとうめていく技法。従来の方法にはない豊かさや明るさが、画面に表現される。
- 6) 『Microsoft エンカルタ総合百科辞典2003』発明家エジソンを参照，Microsoft Corporation，
Thomas Alva Edison (1847～1931) 電球、発電システム、録音装置などの発明家。オハイオ州ミランで生まれた。後半生のほとんどをニュージャージー州で過ごし、1887年ウェストオレンジに巨大な研究所を建設。キネトスコープを発明した。

図版キャプション

- Fig.1 レンブラント Rembrandt Harmensz, van Rijn 「夜警」1642,
Fig.2 ミレー Jean-François Millet 「落ち穂拾い」1857,
Fig.3 スーラ Georges Pierre Seurat 「グランド・ジャット島の日曜日の午後」1884～86,
Fig.4 モネ Claude Monet 「積みわら、夏の終わり、朝の光」1890,
Fig.5 「不空網索観音像」「月光菩薩」「日光菩薩」749年（天平21）ごろ，東大寺／奈良市写真美術館
- レンブラント Rembrandt Harmensz, van Rijn 「3本の十字架」 Bridgeman Art Library, London/New York
「バラ窓」 ノートル・ダム大聖堂（パリ／フランス） Bridgeman Art Library, London/New York
「バラ窓」 シャルトル大聖堂（シャルトル／フランス） 筆者撮影
「聖母子像」 シャルトル大聖堂（シャルトル／フランス） 筆者撮影
- ラ・トゥール Georges de la Tour 「羊飼いの礼拝」1645～50年制作、ルーブル美術館蔵
- ゴッホ Vincent van Gogh 「星月夜」1889年 SuperStock Inc
- デューラー Albrecht Dürer 「メレンコリア I」 Bridgeman Art Library, London/New York
- ターナー Joseph Mallord William Turner 「雨、蒸気、速力」 Erich Lessing/Art Resource, NY
「アテンとイクナートン」 Archivo Iconografico, S. A./Corbis
- ベルニーニ Gian Lorenzo Bernini 「聖テレサの法悦」1647～52,
「ロザリオの聖母礼拝堂円蓋（部分）」1650～90,（プエブラ／メキシコ）
「テアトロ・ラ・フェニーチェ（内部）」1790～92,（ベネツィア）
「サン・カルロ・アッラ・クアットロ・フォンターネ聖堂円蓋（部分）」1638～41,（ローマ）
「サンティエポ・デッラ・サビエンツァ聖堂円蓋（内部）」1642～50,（ローマ）